

# 信濃へ往く婦<sup>ツマ</sup>

——堀辰雄の方法についての序章——

大 森 郁 之 助

## I

堀辰雄の文学の成立過程に、或る意味での△回避▽を看取ること、——或いはもっと根源的に堀の文学に、関わる、營為、総体を一つの回避としてとらえることは、これまで多くの論者によって試みられている。

たとえば丸岡明氏は、堀の幼少期の△作品化▽について、「生父堀浜之助の死は、堀辰雄が七つになった時のことであつた。この死は、少しも堀辰雄に影を落していないようだが、果して、そのままに信じてよいものだろうか。」<sup>(注1)</sup>という疑問を提出した。この点の事実、認否については、堀の身内としての立場から、堀辰雄の従兄や父のお弟子だったといふ人からきくその頃の向島の家は、あの『幼年時代』のやうな明るさはないやうに感じられるのです。」<sup>(注2)</sup>という多恵子未亡人の発言もあって、

丸岡氏の自答のことばを借りれば、「堀辰雄はその主要な作品に、最も身近かな風景や、その風景の中にいる人物達を描かなかつた。」つまり「自分で好きなように形づくつた世界以外に」

眼を向けようとしなかつた、という解釈が、普及している。そして、同じことを、堀の達成した文学的成果という地点からふりかえって見る立場で、「輕井沢生活への憧れが、『暗い翳』を宿す彼の幼年時代からの脱出であり、彼の育つた下町からの脱出であるとすれば、彼のそのような脱出は同時に文学生活への本格的な出発を意味」した、<sup>(注3)</sup>というふうにとらえる時、それは既に堀の作品における、方法論に止らず、文学人としての堀の間、論になつていゝるだろう。

だが、そういう堀の「回避」或いは「脱出」は、或るものを回避して全く触れない、或いは、或る所に置かれた（置かれるべくあつた）全軀幹をそっくり別の場所に移して、足跡一つ残

さない、といったものではない、或いは、——そういったものにはしなかった——。

たとえば、昭和八年の夏から秋にかけてしりいずとして発表された「美しい村」の各章を見よう。

自注として構想されたのおとによれば、「今若し僕が書く」とすると、唯一の題材だけが僕に一番自然に書けさうなのだ。しかしそれは世間に向って書いてはならないことなので困っている。(中略) しようがないから、さういふもののために小説が書きたくて書けないでる男の小説を書かうと思つた結果の作品である「美しい村」の中の「私」、——すなわちさういう心境に関する限り、作者の自己救拔の為の真剣な自己投影として受取るべきものと考えられる「私」が、季節前の避暑地からその「書いてはならない」苦しみの相手役である令嬢に宛てた述懐形式の条で、次のように発想する。——「あなた方とはじめて知り合ひになったこの土地で、あなた方ともう見知らない人同志のやうに顔を合せたり」しないために、あなた方の来る前にこの村を離れようと思う。しかしその日までは「此処にゐることを、そしてときどき誰も見てゐないとき、あなたの別荘のお庭をぶらつくことをお許し下さい。」と。その前後には、「ああ、また、僕はなんだか悲しさうな様子をしてしまった！」とか、「何と悲しさうな様子をするんだ！もう止します。」とかの

注釈を挿んで。(『序曲』)

もともと、さきに引用した堀の創作のおとのような判断に達する以前(と、いうことになる時期)の「私」の意図は、

最近私を苦しめてゐた恋愛事件をそっくりそのままに書いて見たら、その苦しみそのものにも氣に入るだらうし、私にはまずよく解らずにゐる相手の氣持もいくらか明瞭はしないかと思つて、却つてさういふ私自身の不幸をあてにして仕事をしに來たと、説明される。(『美しい村』)

規範的な概念としての「文学者の眼」という冷徹な顕微鏡下に、どんな惨状が見出されるか判らない自己の病巣を差し出そうとしたもの、——とは云い難い。「私」自身の心情という形でも、間もなく、「昔の恋人に対する一種の配慮から、そして唯それによつてその淡々とした物語に或る物悲しい陰影を与へるばかりで満足しようとし」た、という退転が現出するだけだ。

だがそうかと云つて、それと反対の、ただ遠ざかるう忘却しようという、逃亡一方向の回避なのでもない。

再会を恐れるまでになつてゐるかつての愛人の別荘という、かたすとりふいの舞台となり得る場所へも、必要な登場人物を欠いている間は、自分から訪れてみるのである。破滅的な悲傷を

相手の心に呼びおこすかも知れぬ表白は、その一步手前まで口説をすすめてから後に、言いさすのである。彼には回避して来た或るものが有る、そこから脱出して来たところの翳が後方には在るのだ、ということ<sup>(注5)</sup>を、読者の印象の中に保とうとしていることは確かである。

比喩的にいえば、「どうにも逃れられないものとして病氣は背負ふのだけれども、その病氣の状態を人工化して（中略）彼の抒情が孵化するのにいい恰好の体温を絶えず保たうとしているやうにみえる。」つまり、ひどく悪化しそうな場合に「一寸直す」のは普通のこととしても、「好くなりさうだと一寸悪くする（中略）さういふ操縦する能力を持つてゐる」<sup>(注6)</sup>ように見えるのである。

## 注

- (1) 丸岡明氏編『堀辰雄研究』収、「堀辰雄」
- (2) 『堀辰雄 妻への手紙』卷末解説
- (3) 佐々木基一・谷田昌平両氏共著『堀辰雄』収、谷田氏「人生への出発」
- (4) 野田書房版『美しい村』に付載された「『美しい村』ノオト」と題する文章の、草稿と見られるもの。角川書店版『堀辰雄全集』に収録。
- (5) 「美しい村」におけるこの技法については、『風信』二・三合併号収載の小稿『美しい村』の「間道」に詳述した。
- (6) 亀井勝一郎氏、『文学界』昭17・三月号収「対談新著評論」での

信濃へ往く婦

発言。

## II

ところで、堀の「回避」乃至「脱出」の△不完全V性は、もとの場所からの離れ方・避けんとする対象物との絶縁のし方について見られるだけでなく、その次の段階、避け逃れてゆく先の世界の選び方・造り出し方についても、看取られるだろう。たとえば、万葉集の中の二首の挽歌

秋山の黄葉を茂み迷はせる妹を求めむ山路知らずも

卷二、柿本人麻呂

秋山の黄葉をあはれとらふれて入りにし妹は待てど来

まさず

卷七、作者不詳

について、堀は、

その当時はもう原始的な他界信仰から脱して人々は漸くわれわれと殆ど同じやうな生と死との観念をもちはじめたのにちがひありません。だが、自分の愛してゐるものでも死んだやうな場合には、（中略）半ばそれ（かつての他界信仰）を否定しながらも、半ばそれを好んで受け入れようとしてゐる、——すくなくとも心のうへではすっかりそれを受け入れてしまつてゐるのであります。さうしてまた一方では、さういふ愛人の死後の姿をできるだけ美化しよ

たであろうと、考える。（昭18・三月発表、「大和路・信濃路」(三)『古墳』)

堀のいわゆる王朝小説の第三作として昭和十五年七月に発表された「姨捨」を、例にとろう。

堀の作品での最終場面の、一つ前におかれた、

（「姨捨」六）

二十七日に下るに、男なるは添ひて下る。(中略)のゝしりみちて下りぬる後、こよなうつれなれど、いといたう遠き程ならずと聞けば、先々のやうに心細くなどはおぼ

えであるに、送りの人々、又の日歸りて、「いみじうきらくしうて下りぬ」などいひて、「この曉にいみじく大きな人魂のたちて、京さまへなん来ぬる」と語れど、供の人などのにこそはと思ふ。

という原典本文が、

夫がその秋の除目に信濃の守に任ぜられると、女は自ら夫と一しょにその任国に下ることになった。勿論、女の年とった父母は京に残るやうにと懇願した。しかし、女は何か既に意を決した事のあるやうに、それにはなんとしても応じなかった。或晩秋の日、女は夫に従って、さすがに父母に心を残して目に涙を溜めながら、京を離れて往った。程頃多くの夢を小さい胸に抱いて東から上って来たことのある逢坂の山を、女は二十年後に再び越えて往った。「私の生涯はそれでも決して空しくはなかった——」女はそんな工合に目を赫やかせながら、ときどき京の方を振り向いてゐた。——近江、美濃を過ぎて、幾日かの後に、信濃の守の一行はだんだん木深い信濃路へはひって往った。

〔「姨捨」六〕

という堀の作文と、入れ替わるのである。

堀の「姨捨」は、ここで本文を閉じる。信濃国に移ったのち、女主人公と夫との生涯は、本文の向こうに、閉め出される。

信濃へ行く婦

ということを視点を變えて云えば、堀は自己の作品において、（やがて彼女らが任国から戻って後？の）夫の死（たとえば）といった素材事実を、その存在までも、いわば先取りして否定してしまっているのではない、ということである。

自分の作品において事実の進行がそのことにまで及ぶ以前に、別の好み、を挿入し、挿入した所で自分の表現を打切った、というだけのことなのである。

だから、幾何学的な言い方を好むならば、堀が手を下してなした事といえば素材事実の抹消などではないのであって、わん・くっしょんの添加なのであり、それ以上でもそれ以下でもない。読者の方でそのくっしょんの印象に眼を眩まされ、その先きに在（り得）る素材事実を想い見ようしない、という事態は起こるとしても。——甚だ起こり易い、としても——。

それならば、女主人公をも信濃国へ赴かせるといふ、彼女の生涯の過程に関する改変は、仮りに或る素材事実と堀との対決の回避であるとして、対決を単に時間的に引き延ばすという極めて限定された範囲（無限の未来へ、であっても）での回避でしかないのだろうか？ たとえば「美しい村」の続篇「風立ちぬ」で、素材事実としては「療養所の二階に、人にあえない重症で、ねたきりのアヤ子さんと、附添いのゆるされないこゝで、堀さんも入院して看ていた（注）」といううりあるな悲惨さが全く

隠されて、「咯血は危険と云ふ程ではないが、用心のためにしばらく附添看護婦をつけて置くやうにと、院長が言ひ付けて行つたといふのだ。私はそれに同意するほかはなかった。——私は丁度空いてゐる隣りの病室に、その間だけ引き移つてゐることにした。（中略）私は殆ど出来上つてゐる仕事のノートを、机の上に、少しも手をつけようとはせずに、はふり出したままにして置いてある。それを仕上げるためにも、しばらく別々に暮らした方がいいのだと云ふことを病人には云ひ含めて置いたのだ。」と、変型され（『冬』）、やがて、素材事実である病人の死が、非現実な美しさとして、のみ迎えられる、——しかし確かに迎えられる、——その準備をしている、それと同じように!?

しかし、そうは考えられないのである。というのは、形の上からはわん・くっしょんに過ぎない女の信濃行きが、質的に持たされたに違いない或る意義のゆえである。

原典の発想においては、何処であつてもよい夫の任国の符号、でしかない信濃という語彙を、堀作品では、女主人公が身心を投げ込んでゆく主体的選択の対象として実体化した。そうすることの意味について、堀自身の付した後注ともいふべき「娵捨記」（昭16・八月発表。のち改題「更級日記」）には、次のように述べる。

月の凄いいほどいい、荒涼とした古い信濃の里が、当時の京の女たちには彼女たちの花やかに見えるその日暮らしのすぐ裏側にある生の真相の象徴として考へられてゐるに違ひなく、（中略）彼女の回想録を読み了らうとする瞬間に誰しもの胸裡におのづから浮かんで来るであらう信濃の更級の里あたりの佗びしい風物——さういふ読後の印象を一層深くするやうな結末を私は自分の短篇小説にも与へたいと思つた。

だが、ここに規定する信州という地と原典日記とのそれぞれの印象は、じつは、その全体の一面を定着してみせたものに過ぎないように思われる。たとえば、同じ「娵捨記」の中で、原典を藤原道綱母の蜻蛉日記と対比して、

（後者の）息づまるやうな苦しい心の世界からこちらの静かな世界へ逃れてきては、しばらくそれに少年の頃から寄せてゐた何んといふこともない思慕を蘇らせてゐたりした事もあつた。さういふ日の私にとっては、「更級日記」を書いたいかにも女のなかの女らしい、しかし決して世間並みに為合せではなかったその淋しさうな作者すらも何んともなく為合せに見え（後略）

た、という叙述である。「女のなかの女らしい」静かな世界の「為合せ」ということと、「荒涼とした信濃の里」の風物に、ふ

さ、わ、い、い、心境、ということとは、どう組み合わせるのか？  
又。

ここ数年といふもの、私はおほく信濃の山村に滞在して、冬もそこで雪に埋れながら越すやうな事さへあった。それらの日々は、私のもって生れたどうにもならぬ遙かなるものへの夢を、或は其処の山々に、或は牧場に、或はまた樺や樺などの木々から小さな雑草にまで寄せながら、自分で自分にきびしく課した人生を生きんと試みてゐた日々にはかならなかつた。

と述べた個所もあるのだが、そう云うときの「信濃の山村」が環境として守り哺くむはたらきをしたのは、自分に課した人生の「きびしさ」に対してであつたか、それとも、「もって生れた……遥なるものへの夢」に対してであつたか。文脈の上からどう解さるべきか、ということになれば、答は明らかである。「荒涼さ」が「遥かなるものへの夢」を哺くみ或いは慰藉する、という心理構造が、どれほど奇異であり不自然に見えるようとも、とにかく堀にとっては、そうなのだ。堀自身が、そうなのだ、と云っているのである。

注

(1) 北畠八穂氏、『新潮』昭28・八月号収「堀辰雄」

信濃へ行く婦

### III

堀と、信州の風土との結びつきの深さ、信州といういめえじに寄せた堀の愛着の度は、すでにしばしば論考された。この稿では、風土乃至風土のいめえじがそれとして愛着されるに止まらず、結合の客観的必然性を全く欠いた（主観的必然性も全く説明されない）別個の機能を付与され、その機能ゆえに、堀の内部で血肉の故郷化する、というけえすについて考えてみたい。いわば、△信州△が堀にとってしか存在しない或るいめえじの符号、堀だけに通用する同音異義語として登場する作品について。

それは、昭和十六年三月発表の、堀としては珍らしい程に自己を離れた造型を目ざしたと云われる中篇小説「菜穂子」である。

あらゆる意味で、——という大まかな言い方、さまざまな解釈の可能な言い方がそれゆえにふさわしいほどに、概念的な、——△故郷喪失者△として登場する青年都築明は、旧知の仲である、病身の、信州の山村の母娘のいそいそとした帰郷を見送るときに、

此の人達にはそれほど自分の村だとか家だとかが好いのだらうか？——「だが、そんなものの何んにもない此のおれ

は一体どうすれば好いのか？此の頃のおれの心の空しさは何処から來てゐるのだ？……」さう云ふ彼の心の空しさなど何事も知らないでゐるやうなおえふ達に逢つてゐると、自分だけが誰にも附いて來られない自分勝手な道を一人きりで歩き出してゐるやうな不安を確かめずにはゐられなくなる一方、その間だけは何かと心の安まるのを覺えたのも事實だった。

〔菜穂子〕十六

△不安△の内容からいえば殆どとりとめもないものだが、ともかくその△解決△は、次のような形でもたらされる。

梢はまだ昏れずにゐた。そして大きな樺の木、枯れ枝と枯れ枝とがさし交しながら薄明るい空に生じさせてゐる細かい網目が、不意とまた何か忘れてゐた昔の日の事を思ひ出させさうにした。なぜか彼にはわからなかったが、それはこの世ならぬ優しい歌の一節のやうに彼を一瞬慰めた。

彼は暫くうっとりとした眼つきでその枝の網目を見上げてゐたが、再び背中を曲げて歩き出した時にはもうそれを忘れてゐた。しかし彼の方でもうそれを考へなくなつてしまつてからも、その記憶は相変らず、殆ど肩でいきをしなから、喘ぎ喘ぎ歩いてゐる彼を何かしら慰め通してゐた。

やがて、「森が切れて、枯れ枯れな桑畑の向うに、火の山裾に半ば傾いた村の（中略）家々からは夕炊の煙が何事もなささ

うに上がつてゐる、「静かな夕景色」が眺められた時、

急に思ひがけず自分の穉い頃死んだ母のなんとなく老けた顔をぼんやりと思ひ浮べた。さつき森の中で一本の樺の枝の網目が彼にこっそりとその粗描をほのめかしただけで、それきり立ち消えてしまつてゐた何かの影が、そんな殆んど記憶にも残つてゐない位のものに昔に死んだ母の顔らしかった事に明はそのときはじめて気がついた。

〔菜穂子〕二十

青年の母の故郷が、又は没した土地が、信州であつた、といった類の「通俗的」な、しかしそれだけに了解し易い因果關係などは、勿論設定されない。凡そ論理的な意味での理解、第三者における了解を引出すような設定いっさい無しに、この△解決△の必然性に関する発想いっさい無しに、そして都築青年が求めたときにのみ、△信州△は、△母△のいめえじをおうがあらうぶさせるのである。

そもそも「菜穂子」は、郡継夫氏の表現を借りれば、女主人公菜穂子によって、「孤独の中に生を食いつくそうとしてゐる母の生活に反撥し、人々のなかに、具體的な人倫關係のなかに自分をおくことによつて、より堅固な生を獲得しよう」と志した人間<sup>(主)</sup>を追求したものである。都築青年はそういうまにとつて對極的なたいぶとして設定されてはいるが、ここに引用した



△故郷探索Vの旅は、いわば、彼がてまに引き寄せられてゆく場面である。彼さえも、引き寄せられてゆく、その過程として設定されたものであるという点で、この△故郷Vの生成させ方は、卒爾なものであったとは考えられない。

つまり、△信州Vのいめえじと、ゆるし慰藉することが作用の全であるような存在としての△母Vのいめえじとは、堀においては、前論理的におうが、あ・ら・うするものなのだ、と解せざるを得ない。

だが、都築青年が見得た母（——故郷）の幻影は、所詮、△幻影Vである。生活の中の実体としての△故郷Vを獲得するためには、——少なくとも、一たん△故郷喪失Vした彼が獲得するためには、例えば女主人公菜穂子における平凡な中年男黒川圭介との結婚というような、ろまねすくに絶縁を宣した日常<sup>(注2)</sup>的生活を経、かつその中においてでなければならなかった。ここまでの見通しが堀に、この時点で、在ったのだということ、菜穂子と都築明とを二人対照させた作品の構成から、想定できる。

△信濃Vの、堀にとつての、そういう性格、△故郷回復Vについての、堀における、そういう見通しを、凡そ考え得る限りの親身な立場から、結び付けて解釈しようとするれば、恐らく、折口信夫博士の次のような洞察に落着くのだろう。

信濃へ行く婦

此時分の受領の妻の生活は、そんな幸福なものではなかった。男こそ、宮廷・大貴族に仕へるさう言ふ女房を、客分のやうにして迎へて、そのぶらいどに輝く思ひあがった姿を、任国の人々の目に、ほめかしてやるだけでも、天に上る気持ちでしたものであらう。だからさう言ふ夫や、家人にとり捲かれた有頂点な喜び、反省などは都に置き忘れて来たやうな生活をさせてやりたかったのであらう。（中略）ひとり醒めたやうに、この女性に、時々遠国の夫から送りとゞけられる信濃の山づとを、つまらなさうに見てゐたであらう。其をもっと幸福にしてやりたかったのだ。<sup>(注3)</sup>

堀の「真情」をこのように洞察する場合には、他の改訂箇所の意味も自ずと定まってくる。原典の唯一のろうまんすである源資通との夢のような交渉について、堀が、敢て逢う瀬の度数を減らしたことも、「原作よりも女主人公がもっとはかないことをのぞんだ」ため<sup>(注4)</sup>とは限らない。原典に「『失はれし時を求めて』の意味を持」たしめる「額縁」であったところの「夫の死後の落莫たる心境」を、自分の「姨捨」では本文の外へ閉め出したのと、同一の方向へ、女主人公の生を押しやりたい願いをも含んでい得よう。すなわち、夢想や気分への沈淪から解き放し、日常生活事実としての△幸福V、客観的<sup>ばなある</sup>△俗的な△ゆた

かさVに向かって歩き出させる、という——。

だが、堀の持っていた見通し、乃至、しん底での願望を、そのようなものと想定するならば、現実の作品本人として彼が存在せしめたものは、余りに舌足らずであった、ということになるうか。

「姥捨」に続く「菜穂子」での「社会と具体的人倫関係への復帰」は、結局、「希求」<sup>(註1)</sup>としてしか、——そういう希求を持つ段階までしか、描き得なかった。又、同じ年の十二月発表された「曠野」でも自分の愛のすべてを献身的に男に与えたために郡司の婢にまで落魄した女主人公について、

男は女の背を撫でながら、漸つといま自分に返されたこの女、——この女ほど自分に近い、これほど貴重なものはゐないのだといふことがはつきりと身にしてみ分かった。

——さうしてこの不為合せな女、前の夫を歩きずりの男だと思ひ込んで行きずりの男に身をまかせると同じやうな詮らめで身をまかせてゐたこの惨めな女、この女こそこの世で自分のめぐりあふことのできた唯一の為合せであることをはじめて悟つたのだった。しかし女は苦しさに男に抱かれたまま一度だけ目を大きく見ひらいて男の顔をいぶかしさうに見つめたぎり、だんだん死顔に変わりだしてゐた。

……

(「曠野」四)

と、男の側の心情を思い倣すに止まる。

原典の作者における、

女さにこそと思ひけるに、身の宿世思ひやられて、恥しさにえたへで死にけるにこそは。男の心の無かりけるなり。

このことをあらはさずして、ただ養育すべかりける事をとぞ思ゆる。

(今昔物語卷第三十本朝、付雜事、第四 中務大輔の娘近江の郡司の婢となりし語)

という傍観に徹した感想と比べて、女主人公にとっての一種の環境(しかし具体的な交渉を生ぜずに終った環境)である男の心情をこのようなものであつたのだと考えることは、第三者の目と心にとっての救いではあるだろう。又、この原典Ⅱ素材に關しては、これ以上・これ以外の救いを想うことは不可能であるかも知れない。

しかし、そうだからといって、これもやはり一つの救いなのだと考える立場だけが、有り得る唯一の立場ではない。所詮救いが有り得ぬ素材、救いに到り得ぬ製作行為であると断罪することも、可能なはずである。

ところが堀は、「古代の研究がてら、大和にやってきて、毎日寺々を見て歩いてゐるうちに、なんだか日にまし気もちが重くなるしくなつた或る日、「さびしい詮め」としてこういう素

材に行き当り、不時着陸したのだと云う(「大和路・信濃路」(『死者の書』)。これは「菜穂子」の場合と比べてむしろ後退地点での、早められた、ひょっとしたらより狡猾な、自己蹈晦ではないだろうか。

しかもこのΛ詮めVに行き着いたきり、そのまま、彼は、かつての「菜穂子」での地点にまでさえも、立ち戻ろうとしなかった。「菜穂子」での程度にさえも、見通しだけでもせめて保持しようと努めることは、再び、なかった。

話を「姨捨」に戻そう。

その前後の作品という、いわば状況証拠から、或いは又残された作品という結果に対する裁断批評から、帰納的に、一の作品に関して作者が抱いていた(表わした、ではない)人生の見通しや希求を断案するのは、勿論不当である。しかし、その逆も又、同断である。

「姨捨」で堀が、それ自体が救拔であるものとして造り出したΛ信濃Vの意味について、「姨捨」の中では全く開口されず、そして半年後「菜穂子」で、救拔としての在り様<sup>ヨウ</sup>が、そのてまを基準として見れば明白に第一義ではないことを示した。

それで十分とは決して云えないが、Λ堀における・信濃Vのいめえしは、「菜穂子」で何程か感得されるところ以上に確かなには示されたことがない。それ以上に、日常生活的な事実具

信濃へ行く婦

体的に関わってゆく、実体のあるもののだと、納得させるようなΛ信濃Vの持ち込み方が、堀の作品には遂に見られないのである。

以上を総合した意味で、そう、いたものでしかなかった(堀自身にとって)ところのΛ信濃V以外には、救拔の場を持たなかった。開拓しようとする試みさえも、(少なくとも発想は)しなかった、——ということ。ここまで溯って来て、やはり、堀の、精神の行動範囲に関する自己限定という問題に突当る。

Λ徹底したV回避、又は、Λ際限ない力業であるようなV回避は、それがΛ回避Vには違ひなくとも、そうすることを回避する——という回避し方が、そこに在るのである。

注

- (1) 『現代文学序説』五号収、「堀辰雄論」
- (2) 『国学院雑誌』昭41・七月号収小稿「『菜穂子』の涯」(二)
- (3) 角川文庫『かげろふの日記・曠野』巻末解説
- (4) 吉村貞司氏『堀辰雄』収、「姨捨」

#### IV

堀の作品の基質を、そのような、独自の性質のものであるにしろともかく何らかのΛ回避Vと考えるとき、それでは次のような作品は例外であるのか?——

昭和十四年五月発表の「麦秋」(のち改題、「おもかげ」)は、

「弘」の婚約者「伸子」が、かつての弘の恋人で今は亡い「節子」の生家を訪れて、それ迄知らなかった故人のおもかげの端々に触れ、改めて、これから始まる弘との生活を思いやって感慨にふける、という内容のものである。「弘」を堀自身、「節子」を、「美しい村」から「風立ちぬ」の各章に登場し、昭和九年九月堀と婚約、翌年十二月死去した矢野綾子さん、「伸子」を、昭和十二年夏に堀と知り合い翌年四月堀夫人となった多恵子さんに、それぞれ置きかえれば、これは、典型的なまでに私小説仕立ての構成と云える。

その中で伸子は、弘と自分の心情のつながりに就いて、

○弘にはそのアトリエ（生家で節子が愛用していた画室）が、さういふ荒れ果てた庭といふよりか花さける藪といった方がいいうなものに取りまかれてゐるために、かへって大層好ましい場所になってゐるかのやうな言ひぶりだったが、さういふロマチック趣味をあまり持ち合はせてゐない伸子には、それが弘には亡くなった節子の思ひ出がそれによってそっくりそのままになってゐるからだらう位にしか思へなかった。

○ああ、自分はいつになったら、そんなすべてにこだはらないやうな、空虚なくらゐる気もちになれるのかしら。

○すべてのものが初夏の、明るい、もう暑いほどな、気は

ひを見せてゐるなかで（中略）麦畑だけがいかにも冷え冷えとした感じを漂はせてゐる。それがなんだか、ふいといまの自分自身の姿のやうな気がした。——まだ二十五やそこいらで、どんなところへでも嫁いでゆける身なのに、自ら好んで、一生を病気で過すかも知れないやうな弘なんぞの傍に、一生を委ねようとしてゐる自分自身が、自分でもふいと淋しくなった。しかも、その弘には既に愛する人があつた。どうせ自分なんぞは……

と、思いあぐねる。

伸子を悩ませる相手の節子の像も、ここでは「風立ちぬ」のそれとは違ってきている。節子の小さい妹の「洋子」が、実の姉妹以上に伸子になつて、語る節子の生前の印象——「私、お姉えちゃんにいちめられてばかりゐたのよ。だから、お姉えちゃんの死んだときも、ちっとも悲しくなかったわ。……」とか、洋子が「どんな汚ない犬だらうが見さかひもなしに拾ってきては、母や姉の節子に嫌がられて、こんどは半分泣き泣き元の場所にその犬を棄てにやらされたりしたものだ。」とか。——それらは、吉村貞司氏の指摘する通り、「どこの家庭にもありがちな確執であり、趣味の相違であつた。欠点とも言へぬ、むしろ性格の特色である。ところが『風立ちぬ』の節子は、ありふれた瑣事さへもが大きな欠点であり、そんな欠点な

どあり得ないほどに描かれてゐる。<sup>(注1)</sup>のだから。

だが、逆に、「風立ちぬ」で付与されたならば欠点としてであつたろうことを「麦秋」の節子が付与されているからといって、そのことが直ちに、堀にとっての彼女の価値の変動を、意味したりするわけではない。「風立ちぬ」という一の鎮魂歌（過ぎ去つたものへの△慰撫△）は、それはそれとして、自己の現実生活における愛情についての理念△自己嚮導の方針は、この時期既に、そういった相手の「欠点」（△の有無△）その他相手の身の上の事実を、超絶したものになっていた。詳しくは別稿に譲るが、愛情の最基本要素を相手の「完全」さや相手との「創造」の可能性とはせず、「何処から何処まで彼女自身であつて、いま若くあることも、又いつか年老いることも勝手であるところの、一人の自由な女性を受け入れる」という、こちらの姿勢としてゐる、——と考えられるからである。

従つて作品「麦秋」を制作する心情において、そこからの救拔が全然想像できない境地に定着せしめられている人物像といへば、疑いもなく、死者節子の残像ではなくて生者伸子の今後の生である。

卑俗な意味で、傷つけられるのは多恵子夫人であり、それ以前に、堀自らの結婚以来一年間の生活である——ということには、成らなかつたのか？ げんに、神西清氏が堀に「あの作品は

信濃へ往く婦

作品集に再編するのをやめよ」と忠告したとか、多恵子夫人と東京女子大での同級生だった田宮虎彦夫氏人も「雑誌でそれを読んだとき、すぐに『ひどいことをお書きなるわ。あれではあなたがかわいそうよ』と、たいへん憤慨」した、とかいう、<sup>(注4)</sup>「当事者」多恵子夫人の談話も、伝えられている。

いわゆる純粋な文学鑑賞の立場からすれば、作品に関りない事柄であろうが、堀の文学生活はそういう△卑俗な△実生活への関り合いを超絶したところに存在しては、いなかった。いろにかゝる云い方をすれば、関りを生じないように細心の工夫をする、という形での、深い関りを持って成り立っているのである。「麦秋」の場合も、前述のような周囲の△現実的△理解に応える措置として、以後長らく作品集への収録をしなかった、と云われる。真意はともあれ発想の形態としては、堀の、△卑俗な△現実生活△に対する待遇の、一例とならう。

それにも係らず、「麦秋」は書かれた。

一たん発表されたのちの、第二、第三の対読者展示の機会はどう成ろうと、ともかく、一度は展示された。厳密に言えば発表以前に、作品として形象を具えたとき、又は、作品化するはずの素材として自己の意識に対置させたときに、少なくとも堀自身の心情にとっては、十分意味ある大きさ・確かさで存在してしまつたはずである。

このような存在をゆるしたと、それは堀の文学生活の常態から見れば不可解ともいふべき、 $\wedge$ 逸脱 $\vee$ 乃至 $\wedge$ 背反 $\vee$ であったのか？

しかし、似たような事例も他にないわけではない。

婚前の多恵子さんに宛てた堀の私信に於て、<sup>(注5)</sup>

君にこんな事を言ふのをかしいが、僕がたとひ自分が気に入った女性が見つかったとしても、それが綾子に気に入らうもない奴だったら、潔く諦めてやらうと思つてゐた位でした。しかしその点君なら申し分ないと、君を知れば知るほど思つてゐますが、その方の自信はありますか？

(中略) 綾子は死んでゆく前に、僕のゐる前でね、お父さんに僕にいい人を持たせて下さい、と言ひ残していったのです。それがもう最後の言葉になりはしないと思ふほど、死を前にして苦しんでゐましたが、(後略)

(昭13・2・4付)

という発想が、多恵子さんにつきつけられている。

「麦秋」の伸子の発想が些か被虐妄想の気味を帯びているとしたら、それをそっくり裏返した加虐指向と云えそうな内容の婚約者の心情へのはたらきかけであり、又、自意識への挑みかけではないか。

作品と、それに先行する私信とに、形を変えて、重出して

る点から、自他の心情へのかかる処遇が偶発ではなかったものと考えられるべきだとしたら、そういう事態に繋がる最もあり得る成立事由は、いったいどんなものであるうか？ それは、かゝる処遇が他の情況でなされる(ことは無つたのだが、仮りに、なされるとして)場合とは違つて、この情況に於てだけは、——危機を導くおそれが無かつた、——という事情であるう。

その上更に、(もし若干の危機の可能性があつても、それよりずっと高い確度で)べつの或る危機が、この処遇によって避けられるはずだった、という事情が想像されれば、尚更、じつは堀らしい処遇だったのだ、ということになる。

そういう想像を導く「道標」は、あるか？ 在る、と思う。

素材同志の時間的順序からいえば「麦秋」を承ける位置にある、結婚直後の新たな人倫関係を何ということもない軽井沢の朝夕の中で素描した「卜居」(昭13・六月発表)や、「巢立ち」(昭13・九月発表)に、それは見出される。

これは女房の奴には内証だが、私はこの屋根裏部屋にときどき閉ぢ籠つては、全く一人っきりで、昔の自分にそっくりそのままの自分に返つて、心ゆくまで自分の青春に訣別を告げようという陰謀。——

(「卜居」)

とか、小鳥の種類についての村の靴屋と夫との、やりとりをめぐつての、新妻の心中の、

しかし実をいふと、彼が何処までも本気でさういふことを彼女に言っているのか、彼女を揶揄っているのぢやないか、よく分らないので、その方が本当は心細いのである。

(「巢立ち」)

という想定とかが、それである。

題材だけでなく、その掘り下げ方でも、堀には(或いは堀にさえも)珍しい程の身辺瑣事報告ふうな作品であるが、それだけにそこに在る(そのみが在る)夫婦間の心理は、堀にあって十分意味がありかつ満足されるものであった、と、解釈するのが順当だろう。

そして、その心理の顕著な特徴は、相手への全面的な接着と区別する語としての間隔が、夫の側から差出されて二人の間に横たえられている、ということである。

のち、昭和十五年九月発表の「野尻」(後に改題、「晩夏」)では、人けのない湖畔を散策する夫と妻の間に、「孤独の淋しさアインザムカイトとはちがふが殆どそれと同種の、いはば差し向ひの淋しさツワイザムカイトと云

ったやうなもの」が「此の人生にはあらうぢやあないか?」という見解が見られる。この人生観に即して云えば結婚生活観を、見解という形でなく日常生活の中での具現形象として描いたのが「巢立ち」であり「卜居」である、と見れば、この生活心理に到るべき延長線を溯ったところに、「麦秋」で客観化

信濃へ往く婦

され、書簡で論すように説きかけられた「弘」の心理Vを、位置づけることが出来るのではないか。すなわち、(やがて「weisam-keit」がそこに成立するであろう程度の)空隙が、「弘」と「伸子」の間には存在するはずのものなのだ、という理解を事前に提唱し、又は、或る到達点からふりかえって跡づけをするものとして。

そういう、(堀にとってなければならぬものと考えられたところの)空隙を、結婚という具体的人倫関係の中でずるずると失なっていくことを、恐れた、と仮定すれば、堀が伸子を「彼」としては珍らしくV冷酷に突き放したまま作品を閉じているのは、じつは彼らしい保全策、彼の身にとっての「危機」の回避V形態、——であり得たことになる。

そして同時に、(同じことの言い換えであるかも知れないが)婚約者とか夫婦とかの関係(重点的に、婚約中の女性や妻の心情、と云いかえて考えてもよい)には、この突き放しによってひどく壊されるはずのもの、又、どこまで壊されるか見通しのつかぬやうな情況がない、と判断されたとすれば、——前項との総合所見として、結局、かゝる作品化、かゝる表明によって、回避されるはずの或る危機の方が、当面、後者よりも重大な危機であると、判断されたとすれば、——この作品化、この表明は、至当な選択であったことになる。

後者については、この稿では考察する機がなかった。だが、婚約中の書簡から「野尻」までの結婚観は、じつは、後者の軽さの判定・（その結果としての）無視の態度をも、潜在的に包含しているはずのもの、少なくともそれに通じているものではなかっただろうか。

こう考えれば、この一群の発想も又、堀の「回避」の執拗さ、とでもよぶべきことに、収斂するであろう。

## 注

- (1) 吉村氏『堀辰雄』収、「姨捨」
- (2) 前引『菜穂子』の涯」(二)を参着されたい。
- (3) ふらんすの作家じゃつくⅡしゃるとんぬの語として、堀が「窪川稲子との往復書簡」(昭14・十一月発表。のち改題、「美しくかれ、悲しかれ」)に引用したもの。
- (4) 読売新聞社編『生きている名作の人々』に収録。
- (5) 『堀辰雄 妻への手紙』に収録。

付記 本稿は、雑誌『風信』（風信の会発行）二・三合併号収載の小稿「『美しい村』の間道」（昭43・二月稿）の、続篇としてまとめた。